心の輪を広げる体験作文　小学生部門　◆佳作

「ぼくとゆいちゃん」

相模原市立富士見小学校　四年　和泉（いずみ）　伊織（いおり）

二〇一四年九月、ゆいちゃんが生まれました。ぼくは妹が生まれるのを楽しみに待っていました。ぼくはじいじとばあばの家にいたので、お母さんとゆいちゃんが帰ってきた時に初めて顔をみました。「かわいいね。」と、言ってたそうです。

二〇一七年、もう一人の妹が生まれ家がとてもにぎやかになりました。下の妹が大きくなりおしゃべりをたくさんしてくれるのにゆいちゃんは、「ぱぱ、まま、ブーブ。」と、単語しかしゃべらず、気づいたらしゃべらなくなりました。時々、苦しそうにねていたのでゆいちゃんは検査を受けました。

「おそらくてんかんです。」と、言われたそうです。ぼくは障害のことはよく知りません。名前も知りません。お母さんから聞いてもすぐ忘れてしまうくらい身近な言葉ではありませんでした。ぼくは、作文を書くために発達障害のことについて調べました。

「発達障害は病気ではなく特性なので、完治はむずかしいですが、薬物りょう法、生活りょう法によりしょうじょうを和らげることで、特性と向きあいやすくなります。」と、出てきました。色々調

べてみましたが、「SST」など専門的な言葉は今のぼくにはむずかしかったです。

ぼくはゆいちゃんとのコミュニケーションの取り方は、本を読んであげたり、指差しで聞いてくる事に答えてあげたりすることが一つだと思っています。ゆいちゃんは、働く乗り物が好きで、音の鳴る本や、ぼくのポケモンの図かんがお気に入りです。本当はお話しがしたいです。

むずかしい言葉や事など今はわかりませんが、学校や友人との時間を大事にすごす事でむずかしい事も乗りこえられると思います。しょうらい、ゆいちゃんや何かでこまっている人の力になれたらいいなと思いました。